

「……しべもあ憶記に衣上此もに同一……」

乙市民 お下りなされ。

とアントニー壇を下り屍骸
の枕邊に立つ

丙市民 いかにも一同承知の上ぢや。

丁市民 サア、環を作つて、圓く並べ。

甲市民 柩へ寄るな、御遺骸へ觸るまい。

乙市民 アントニー公の席を明けい、ヤ

レ、アントニー公は貴い方ぢ

や。

ニアント コレ、其様に詰め懸るな、
後へ。

大市民

後退れ、席を明けい。

ニアント

さて一同には、涙あらば只今流す用意を致されよ、見られよ、一同にも此上衣に記憶あるべし、嗟想ひぞ出つる、折しも夏の夕、恰もネルヅ井の蕃族を平定なしたる當日の事なりしが、陣幕の中にて初めて之を着されたを、拙者は未だ忘れも致さぬ、見られよ、此上衣の表の、これなる傷は、カッシアスがヒ首の透りし痕、又これなるは、勇猛無比のカスカが刀痕、又これなる傷口は、御寵愛のブルータスが劍の通ひし路、いかに人々、其時シーザー公の御血潮が、刃の後を追かけて、さつと迸り出てたる痕に目を留めよ、只今公が御胸の扉を叩きたるブルータスは、殺意あつてかさもなきか様子如何にと見届けむと、戸口を走り出てたる風情、思うても見よ、彼のブルータスが、シーザー公の厚き

御寵遇を蒙りしは、一同も承知の通りならずや——想へばシーザー公には、飼犬に御手を噛まれしも同然、されば此數ある御負傷の中で、是に増す御深負傷はなし、さてこそ御寵愛のブルータスが、己を刺すよと見られし時、シーザー公の御胸には、日頃かく迄恩寵を加へし者が、忘恩背徳の舉動に及びしかと、後悔の念が一杯で、其外の叛人共が、太刀劍の傷よりも、其御無念故に御落胆、彼の大神な御心も沮喪して、御上衣を以て御顔を掩へしまゝ、血潮の飛沫に漬りつる、ポンペーが彫像の臺下に敢果なき御最期、あゝ人々、こはそも何の最期ならむ、管に故公一人の御最期にはあらざるぞ、かく申すアントニーも、汝等一同も、早やこれにて羅馬市民の最期を遂げしなるぞ人々、今や非道の叛人横行して羅馬は闇、あゝ一同にも泣かるゝか、哀悼の情を催さるゝ

と見え、た、それこそ汝等が善心を泣く涙、優しの人々よ、乍去汝等にはシーザー公が、衣服の傷痕を見たるのみにて、早や其様に泣かるゝか、此處を見よ、逆徒の劍に抉られたる、コレ此御肌膚を覗かれよ、

甲市民 あゝいたましの御有様。

乙市民 あゝ彼の高偉いシーザー公を。

丙市民 何といふ悲しい事ぢや。

丁市民 え、逆徒奴叛人奴。

甲市民 淺ましい有様ぢやなア。

乙市民 此仇は取らにやあ措かぬ。

大市民 サア、復讐ぢや——出懸ろく——探し出せ——焼いて仕舞へ——殺せ——屠れ——逆徒一人も生かして置くな。

ニアント いや待たれよ人々。

甲市民 待て、アントニー様が物を仰せらるゝわ。

乙市民 アントニー様のいふ事なら承らう、仰にも従はう、我等が命も差出さう。

ニアント 優しの友よ懐かしの同胞よ、俄かに潮の寄せる様な、一搔三味は憤まれよ。此惨事を敢て爲したる人々は、當代の義人君子なるぞ、如何なる内密の理由あつて、かゝる所業に及びしか、拙者には合點參らねど、賢慮に富み仁義に明るき彼の人々、汝等がよう合點の參るやうに、必ず辯解を致さるゝならむ、聞かれよ人々、拙者は決して汝等が心を動かさむとて來りしならず、此のアントニーは、ブルータス如き辯者にあらず、一同も豫て承知の如く、たゞ友誼に脆き、朴訥野鄙の木

強漢、彼の人々とても、かくと承知の上なればこそ、かく公けに此拙者が、シーザー公の御身の上に就き、一同に語るを許されたれ、此拙者は人の血を亂すべき頓知も頓才もなく、辯舌も音聲も持合はさぬ、只だ有のまゝを語る外に能もない、只汝等に申せし所も、既に汝等の知れる所を反覆し、さては故公が御傷口といへる、無言の口を指し示し、拙者が詞に代へたる次第、乍去若し此アントニーと、彼のブルータスとが入違へ取替つたなら、此アントニーは、辯才を以て汝等が精神をかき亂し、シーザー公が御傷口には、一つは舌をつけ、羅馬中の石礫をさへ奮ひ立たせずには、措きはせまい。
拙者の砂、アントニーの骨、
依りては、

大市民 いや我等とて、此まゝには濟まされぬ。
甲市民 ブルータスの家を焼いて仕舞へ。

丙市民 サア〜出懸けやう、叛人等を探し出せ。

ニアント いや待て、まだ〜申す事あり、申聞けたい事がある。

大市民 コレ〜静にせい、アントニー様の御詞を承れ。

ニアント いかにも人々、汝等は無我夢中の舉動トモギを致さる、抑も何の廉を以て汝等さばかりシーザー公を御慕ひ申すぞ、あゝ汝等は自らそを承知致さぬ、此上は某が語つて聞かさう、汝等には拙者が先刻申聞けたる、遺言の一條を早忘れ果てしな。

大市民 いかにもさうぢや、先づ〜此處で遺言を聞いて往かう。

ニアント シーザー公御自筆の遺言狀は即ち此處これに——(みと書附を讀)羅馬の市民全體へ、一人毎に七十五「ドラクマス」の貨幣を遺物として遺すべしとある(一ドラクマスは約九片に當るといふ)。

乙市民 いや見上げた御心ではある、此復讐は我等が致す。

丙市民 あゝ有難いシーザー公。

ニアント 先づ静かに聴聞あれい。

大市民 静かに〜。

ニアント 此上に又シーザー公には、御所有のあらゆる莊園、別邸、其外新設の庭園等、タイパー河の此方にあるを、悉く汝等に譲り、永世子孫に傳へしめ、長く遊覧娛樂の場となさしむるとある——あゝシーザー公は既に亡き人の數に入り給へり、何時の世にか又羅馬に、此の如き偉人あらむ。

甲市民 いや〜此様な偉人が又とあるものか、ヤイ〜皆の衆、シーザー公の御屍骸を禮堂(公會堂内)で焼いた上、其燃燼もくもくで叛人等が家々を焼

さ拂へ、サアノ、御屍骸を擔げ〜。

乙市民 誰ぞ火種を持つて來い。

丙市民 腰掛共を打碎け。

丁市民 腰掛でも窓框でも何でもかても引摺出せ。

と市民大勢屍骸を擔ぎ退場

ニアント いや藥は大分廻つたやうぢやな、これでどうやら騒動の種を蒔

付けた、萌える末が待たるゝ事ではある。

オクタピスの近侍登場

ヤア其方か、様子は何と。

近侍 オクタピアス様には、既に羅馬へ御着きなされました。

ニアント して御宿は何處ぢや。

近侍 レビダス様と御兩人にて、シーザー公の御館へと御越なされまし
た。

ニアント 然らば拙者も、早速參上致し御意を得やう、願うたり叶うたりの
御入來、運の神は我等に笑顔を見せさせらるゝ、此模様では、何ぞ我等
に善い物を取らせらるゝ事であらう。

近侍 道々噂を聞きますれば、ブルータス、カッシアスの兩人には、狂人の
様になつて、羅馬の城門を騎り抜けたの事で、ムります。

ニアント 定めて彼等とても、拙者が詞故に、人民の心動さし由を薄々聞か
れしならむ——いざ〜オクタピアス殿の許へ業内致せ。

と兩人退場

第三場—全前 街上

詩人 シンナ登場

ナシ
ン シーザー公の招宴に列ると見し昨夜の夢、凶事の兆かと氣遣はれ、胸騒ぎせらるゝ事ではある(舞臺の席に列する夢は悪夢)から外面を徘徊致さむ心とてもなけれども、何とやら我を導てくものあつて、此様に徘徊致す。

市民大勢登場

甲市民 ヤア、其方は何と申す者ぢや。
乙市民 其方は何處へ參る。
丙市民 其方の宅は何處ぢや。

丁市民 女房持か獨身者か。

乙市民 各の間にさつさと返答致し居れ。

甲市民 手短かに申すが宜い。

丁市民 そして手賢く申すが宜い。

丙市民 そして有の儘に申すが宜いぞ。

ナシ
ン 身共は何と申す者ぢや、何處へ參る、宿は何處、女房持か、獨身者か、そして各の間に、さつさと手短かに、手賢く、有の儘に答へよと云はるか、さらば先づ申さう手賢く、身共は獨身者ぢや。

乙市民 何と申す獨身者が手賢い、女房持は薄鈍ぢやと申す云分ぢやな、一つ擲されぬ用心せい、先づさつさと後を申せ。

ナシ
ン さつさと申せば、身共はシーザー公の葬式へ參る者。



『殺せ殺せ』——アサア燃えさしを手に持てい

甲市民 それは心より御いたはしく思うてか、但

しは心ならずもか。

ナシ 御悼しう思うてぢや。

乙市民 それでこそさつさと罅が明いた。

丁市民 宿は何處ぢや手短かに申せ。

ナシ 手短かに申せば身共が宿はカピトルの

傍ぢや。

丙市民 名は何と申す、有の儘に申せ。

ナシ 有の儘に申せば名はシンナと申す。

甲市民 イヤ八つ裂に裂いて仕舞へ、此奴は逆徒

の一人ぢや。

ナシ 身共は詩人のシンナぢや、詩人シンナぢやぞや。

丁市民 イヤ裂いて仕舞へ、日頃悪詩を作る奴、悪詩の報いぢや裂いて仕舞

へ。

ナシ 身共は叛人のシンナてはないぞ。

乙市民 構ふ事はない、名がシンナぢや、其名を胸からもぎ取つたなら、放し

てやれ。

丙市民 殺せ——サア——燃えさしを持つて来い、ブルータスの家へ

往けカツシアスの家へ往け何れも此れも焼け、デシアスの家へ

も往け、カスカの家へも往け、リガリアスの家へも往け、サア——皆往

け。

と一同退場

第四幕

譯者曰く、第三幕と第四幕との間には約十八ヶ月の経過あり、此間にプルータスとカツシアスとは人民の反抗に居堪れず僅に身を以て羅馬を落ち延び、前者は希臘のマセドニアに、後者は小亞細亞に逃れて、各其同志を糾合し兵を集むること數月の後、二人又相合して羅馬に攻上るの計畫あり、又羅馬に於てはシーザー死後アントニー、オクタビアス、シーザー及びレヒダス三人勢權を得て所謂三執政と稱し、羅馬國を三分して各其一を保ち、帝王の如き權力を振ひしが、プルータス等兵を合せ攻上るの風説を聞き、將さに之に對するの準備を爲さむとす、第四幕は恰も此時機を以て始まるものと假定して一讀あらむことを望む

第一場—羅馬—アントニー家の一室

アントニー、オクタビアス及びレヒダスの三人卓を圍みて座し居る



なげずれ入に申の數も兄舍御の殿貴殿スタヒレ
になうらムて知承御いますまり

アント 然らばこれだけの人員を、死罪に行ひ申すてムらう、姓名へ一々黒點をつけましたぞ。

ピオクタ レヒダス殿貴殿の御舍兄も數の中に入れずばなりますまい、御承知でムらうな。

スタヒレ 如何にも承知は致しました——

ビオ
アク
スタ アントニー殿しんし點を御つけなされ。

タレ
スピ 但しマーク・アントニー殿貴殿が甥御のバブリアスも、生けては置
かぬと申す御約束が承りたい。

ニア
ント いかにも彼奴も生けては置きませぬ、御覽あれ此の如く點しんしをつ
けまする時にレビダス殿貴殿はこれより、故シーザー公の御館へ参
られ、御遺言書を此處へ御持参あれ、御遺産分配の額たかも、切詰められう
だけ、切詰めるやう熟と詮議致さう。

ダレ
スピ して御兩所には、此處にて御待ち下さるか。

ビオ
アク
スタ いかにも此處にて、さなくばカピトルにて御待ち申さう。

とレビダス退場

ニア
ント いや碌々たる小人とは彼が事、走り使ひが身分相應、天下を三分

して、其一を保つの器ではムらぬ。

ビオ
アク
スタ ハテ貴殿は、彼を其器と思召せばこそ、死罪に處すべき誰彼の詮
義に就き、彼が意見をも、わざ／＼御聴きなされたではムらぬか。

ニア
ント いやオクタビアス、かう見えても某は、貴殿よりも、少々長らく浮
世の鹽を嘗めましたぞ、我等が此度の大計畫、稍もすれば世間の疑惑
を惹くの恐あり、其疑惑讒謗の、重荷を背負はせう爲めにこそ、此様な
司位つかさどをも許して置け、誠は金銀の荷を積む驢馬も、同然、我等が差圖で
追立て驅り立て、汗水垂らして動めけども、我等が寶物を、目的の地に
運びし上は、積荷を下して放つばかり、放たれた驢馬が耳を振り、野の
青草を漁あさりに行く、それを即ち彼が身上。

ビオ
アク
スタ それは貴殿の御随意なれど、さればとて、彼は至つて勇敢無雙の

軍師でムる。

ニアント げに、オクタピアス、某が乗馬なども其通りでムる、夫故にこそ某は乗馬に飼料を惜みませぬ、又口頃は戦場の駆引一進一退の足取を訓練致し、彼が肉體の運動は、某が精神次第で、如何やうにも相成るやうに仕込みます。レピダスとても何うやら似寄つた所がムる、即ち能く教へ能く練り、能く指圖を致さねば役には立ちますまい——とかく精神の足らはぬ男で、何事も他人の爲し來り、爲し陳した物眞似を致して、得々と構へ居ります。所詮我等が道具と御心得あれ——それはさて置きオクタピアス殿、一大事がムる御聞きあれ、ブルータス、カッシアスの兩人には、頻りに軍勢を集め居るげにムれば、我等も急ぎ勢揃を致さねばなりませぬ、就きては我等が盟約を鞏固に致し、

確かなる味方を作り、あらゆる方略を案ぜねばなりませぬ、されば少しも早う評定の席を開き、我等に對し密かに陰謀を抱く族を見現さむ最上の手段は如何に、既に現れたる危難には、如何様に當るを確實と致すべきか、其邊熟と評定致さむ。

ピオク ス いかにも左様致すてムらう、今ぞ我等が盛衰興亡の岐れ路隙を覗ふ敵共は、四邊りに充つる今日此頃、表に笑顔を粧ふ者も、裏に異心を挿み居るは、珍しからぬ事てムる。

と退場

第二場——サルヂス(小亞細亞なるリ)附近の陣營

ルータスが陳屋の前

軍鼓の響、アルーダス、ルシリアス、チ、ニアス及び兵士大勢登場、他方よりピンダラス(カツシァスが僕)登場一同の前に来る、又少し隔りたる所にルーシァス登場

タプスルー 停れッ。

アルスリ 停れッ、合詞を申せ。

タプスルー いやルシリアス、カツシァスは當方へ参らるゝか。

アルスリ いかにも當方へ参られます、即ちこれなる従僕ピンダラスは、

主人カツシァスの使者として、伺候致した者でムりませう。

とピンダラス一書をアルーダスに呈する

タプスルー それでこそ満足致す——こりや、ピンダラス、其方の主人はな、我から變心致したか、又は悪人の誣言に迷はされたか、兎角拙者に對し、

不安の念を懐かする如き、舉動きんどうを致された、乍去當方へ参るとある上は、やがて委細の事情も判明致すであらう。

ラピスダ 餘人は知らず主人カツシァスに限つては、清廉潔白の御身の上と、必ず御判明遊ばすてムりませう。

タプスルー いかにもさうなうては叫はぬ筈。

とピンダラス退場

ルシリアス、一言問ふ事がある、カツシァスには足下に對し、如何やうの待遇を致された、語つて聞かされい。

アルスリ 某は至つて鄭重なる禮遇に預りましてムる、乍去、以前の如き隔なき取りなし、奥底なき語らひは、致されぬやうでムる。

タプスルー それぞ正しく、情誼の冷めゆくなべての筋道、心して見られよル

シリアス情愛の衰へ初むる時、人は力めて禮節を用ふるもので、
露雜り氣なき友誼には、禮義作法の小細工も不要なれど、友誼は衰へ
て、心既に虚なる者は、轡に手を懸け曳かるゝ時のみ勇みを見る乗
馬同然、遅ましさ様子を粧ひ、元氣に満つる見得を作れど、いざ戰場と
いへる時、鞭拍車にて責め立つれば、忽ち頂を垂れ倉浪と倒れて再び
用を爲さず、日頃の重望に背くが習ひ——（此時喇叭の音）ヤ、カッシア
スの軍勢が参ると見ゆるな。

アルシ いかにも今夜は、此サルヂスに宿泊なさむ思案の由にて、部下の
大部分騎兵を擧つて、御出あるとの事で、ム。

と喇叭の音近より来る

タブル 聞かれよ、早や來着致された、徐ろに参つて對面致さう。

アカスシ (舞臺の外にて) 停れつ。

とカッシアス兵士大勢登場

タブル 停れつ、合詞を申せ。

甲兵士 停れ。

乙兵士 停れ。

丙兵士 停れ。

アカスシ 賢明なる老兄には、ようも——某を御侮辱なされましたな

アルシ 神明も照覽あれ、敵をさへ侮辱などは致さぬ某況して同盟の賢

弟を侮辱致すべきか。

アカスシ ヤア、ブルトタス、其嚴肅な眼色の中に、禍心を藏する貴殿が陰險、

其上——(と激して聲)

タブル 静かになされカツシアス、不満の筋あらば、手柔かに申されい——

いや貴殿の心中はよう承知致す、此兩軍勢の面前にて、我等二人が争論の有様は見せともムらぬ、たゞく和親の係が見せたうムる、先づく御軍勢を遠ざけて、某が陣幕の中に御入りなされ、さて其上にて、御不満の筋あらば、残りなく仰せられい、静かに聴問致すてムらう。

アカツシ 然らばビンダラス、汝は隊長共の許に参り、兵士を少しく彼方へ遠ざくるやう命じて参れ。

タブル ルーシアス、其方も同様に取計らへ、又我等が談合を終る迄、陣幕の邊りは、固く人拂ひに致し置け、ルシリアス、チ、ニアスの兩人へは、大儀ながら警固を頼みましたぞ。

と一同退場

第三場——全上——ブルータスが陣幕の中

ブルータス及びカツシアス登場

アカツシ 老兄には某を侮辱なされしと申すは、此一事に依つて明かてムる、即ち貴殿に於ては、彼のルーシアスペラなる者が、此國なるサルヂス人より、賄賂を受けしとの廉を以て、嚴罰を彼に加へ、軍中に御徇へなされた、然るに其儀に就き、某は前以て彼を承知致せし故、彼が爲めに辨解の書面を認め、御手許に差出せしに、熟讀も遊ばされず——

タブル いや彼の様な折に、彼の様な御書面を御遣しあるとは、貴殿自ら辱しむると申すもの。

アカツシ いや只今如き騷亂の時勢に、取るにも足らぬ細瑾を、一々詮議立

は迂濶千萬の汰沙でムる。

タプスル 御聞きあれカツシアス殿、さいふ貴殿御自身も、餘り金錢に慾を
渴き、司位を金錢で、下賤の輩に御賣りなされるとは、さて、申様もな
い次第でムる。

アカスツシ 何、某が金錢に慾を渴く(半分抜く)、お、これがブルータス殿の御
口より出づればこそ、若し他人なら手は見せまい。

タプスル いやさ、かやうなさもしき果動も、カツシアスといふ名にめで、
こそ、責罰の鞭も暫く影を潜むるなれ。

アカスツシ 何、責罰ぢやと。

タプスル 一 ヤイ三月望の日を忘れたか、大ジュリアスを殺害なせしも、正義
の爲めにはあらざるか、よも我等徒黨の中に、正義の爲めならで、彼が

現身に刃を觸れし者はあるまじ、何ぞや、世界第一の偉人シーザーを、
國家を蝨毒する盜賊の巨魁なりとて、誅戮なしたる我等の中に――
今其我等が、今更汚らはしい賄賂を以て、清淨なる指を汚し、我等が世
にも希なる大名譽を惜氣もなく、一攫の金銀に賣らるべきか、某など
は、左様な羅馬人で生存へうより、寧ろ狗になつて、月影に吠ゆるが望
みてムる。

アカスツシ いや其様に御吠えなされな、勘忍の緒が切れ兼ねぬ、餘り御差圖
立が過ぎまするぞ、憚りながら、此某は一軍の將としては、貴殿よりも
永らく職にあり、部下の引廻し使ひ道にはたけてムる。

タプスル 愚か、足下は其様な器ではない。

アカスツシ いや其器でムる。

タブル ー いや〜断じて其器にあらず。

アカスツシ 見え、黙りめされ、某とて何時迄も、勘忍は致されぬ、命が惜くば、此上とやかう仰せらるゝな。

タブル ー 止めよ、迂^ウ愚^ウ者。

アカスツシ ちえ、何たる暴慢。

タブル ー コリヤ聞けカツシアス、申開ける事がある。

とカツシアス怒りの顔色凄じく、何事か云はむとするが如き様子にて詰め懸くる

ヤイいかに足下が怒ればとて、此まゝにして止むべきか、狂人に睨まれて、恐れ^{オノ}取^ノく某ならず。

アカスツシ お、神々(此方を歩み廻りながり)かく迄罵られ、それでも勘忍致

さずば叶はぬか。

タブル ー かく迄とや、いやまだ〜此上申さぬばならぬ、足下の高慢な胸が、破れ裂ける迄悶^ムえうとまゝ、乍去其怒りの顔色は、御自分の家來に見せて、堪能する程恐れ顔かしむるが宜い、此某が足下の怒りに避易し、只管足下の眼色を覗ひ、足下の一喝に容易く踴まる弱武者と思はるゝか、(とカツシアス、歩を留め)いやさ立腹の御馳走は、拙者堅く御辭退致せば、足下自ら腹の皮の、裂け果てる迄飽食して、我から後に思ひ當るが上分別、此後足下怒り狂はゞ、此某は善い慰みと見物致し、物笑ひの種と致さう。

アカスツシ ちえ、これ程迄――。

タブル ー 足下自ら某などより老功の軍將と仰せられた、其高言空しから

ず、天晴の將軍とならせられなば、某とても満足致す。某なども、以來は高德の君子を師範と致し、一層稽古を勵むてムらう。

アカスツシ (静か) 何につけても貴公には、某を曲解なさるゝ、某は貴公よりも、永らく職務に携はれりところ申したれ、貴公よりも老功とは申さぬ心得、果して老功と申されましたか。

タアスル 1 よしや申されたりとも、別段氣にも留めは致さぬ。

アカスツシ 想へば故シ、ザ、存生中と雖も、かばかり某を嘲弄は致されぬ。

タアスル 1 黙らしやれ、故シ、ザ、に對しては、一言の詞を返す事だにえうせぬ足下が。

アカスツシ 此某がえうせぬ。

タアスル 1 いかにも。

アカスツシ え、何と云はるゝ、一言の返言をもえうせぬと。

タアスル 1 命が惜しさにえうせられぬ。

アカスツシ (悪が漸う制) 某が從來の好誼に、除り御甘へなさるゝな、後日口惜しう思ふ事でも、爲し兼ねる某ではムらぬ。

タアスル 1 後に口惜しう思ふべき事の數々は、既に足下爲されし筈、いやさ其様な嚇し文句に恐れは致さぬ、正廉の鎧を身に纏ふ某には、空吹く風と氣にも留めぬ、軍用金の調達を、足下許頼み遣はせしに、足下はそれを拒まれた——畢竟某は不正の手段をもて、一錢をも集るの道を知らねばこそ、嗚乎不正の手段を用ひ、農民の膏血を絞らむよりは、寧ろ我胸をかつさばき、血の滴を錢に替へたきが某の望み——ともかくも兵士に給料を下さむ爲め、用金の調達を御依頼致せしに、足下は

そを拒まれた、これがカッシアスとも申さるゝ軍將の、某に對し爲さるべき所爲でムらうか、此某はカッシアスに向ひ、かりにもかやうな所爲は致さぬ所存、ちゝ此マーカス、ブルータスが、取るにも足らぬ金錢を同盟の友に吝むが如き、鄙吝の徒となるならば、天神直ちに霹靂の火を降し、此身を微塵に粉碎かれむ法もあれ。

アカスツシ いや某は拒みは致さぬ。

タプスル いや拒まれた。

アカスツシ いや拒みは致さぬ、大方某の口上を、御傳へ申せし使の者が、不行届故の御邪推と見えたり——ブルータス殿こそ、某を這々の躰に御逢はせなされた、相互の瑕瑾を見直し合ふが、朋友の情誼なるべきに、ブルータス殿には、却つて針小を棒大の御詮義立。

タプスル いや其瑕瑾とても、某に御仕向けなくば、何の詮義立を致すもので。

アカスツシ 親友とは名ばかり、貴殿は某を御愛し下さらぬ。

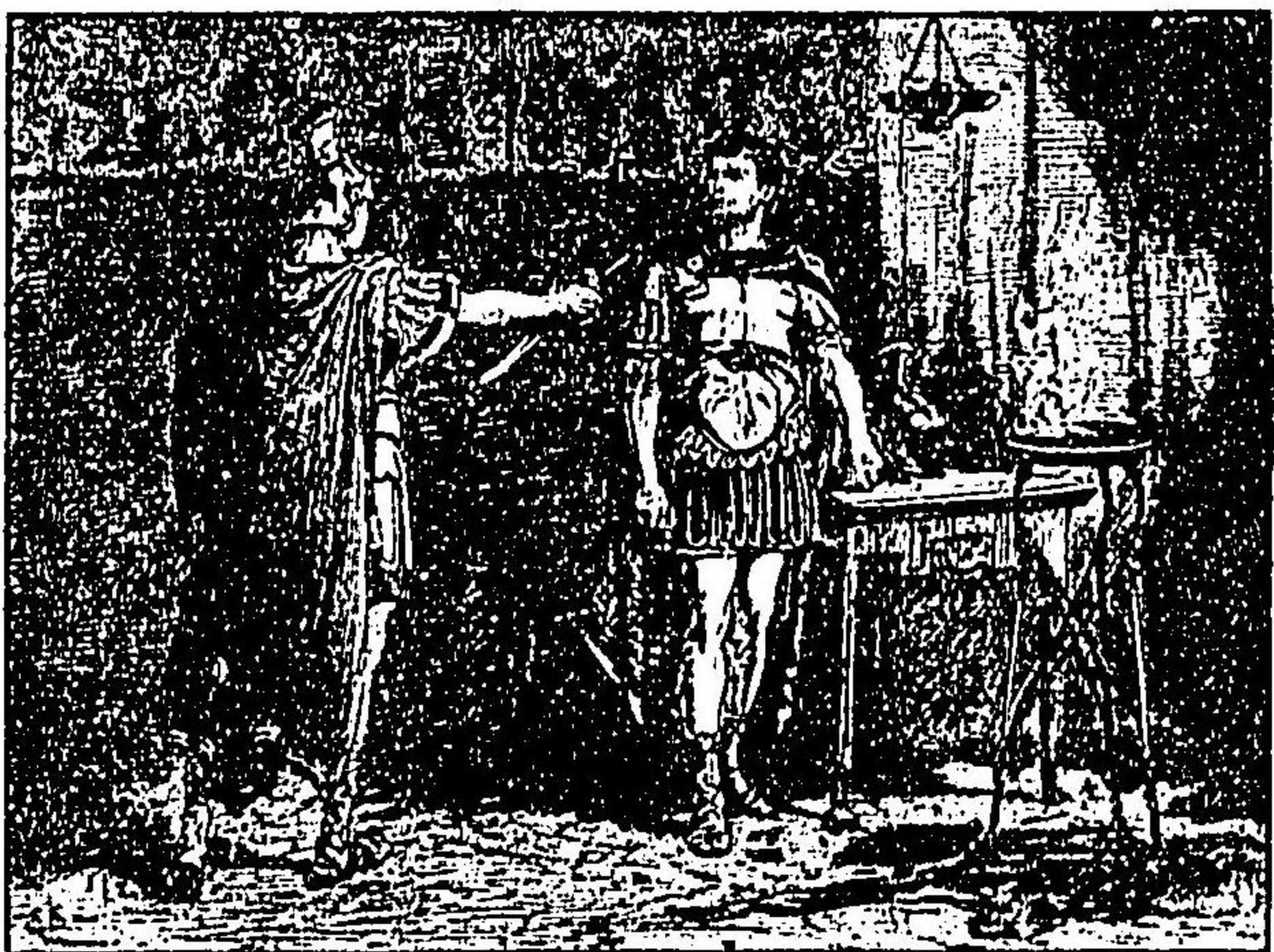
タプスル 某とても足下の瑕瑾は愛しませぬ。

アカスツシ 友愛の眼には、さやうな瑕瑾も映らぬ筈。

タプスル 阿諛諂媚の眼には、オリンパスの山程大きく見ゆるものも、目で

見ぬ振を致すもの。

アカスツシ え、早うアントニー、オクダバアス等に迫られて此身一人が殺されたい、カッシアスは、つくづく浮世に倦み果てた、我が慕ふ友に憎まれ、兄と頼む人に棄てられ、下郎同然に耻しめられ、あらゆる瑕瑾は許さ立てられ、登を帳に記し留められ、調べ上げられ、詰んぜられて、我



「……御覽、これに某の短刀が、ムが胸に」
「甲も當てて、ムが胸に」

が眼前に讀上げらるゝを見る
つらさ。おゝ、某が精神を此の兩
眼より泣き潰す法もがな——
御覽あれ、こゝに某の短刀がム
（と短刀の鞘）こゝに甲も當て
ぬ胸がムる、此中にこそ、富神ブ
ルトーが金山よりもいや貴く、
黄金銀にも優りて、いや貴き心
臓がムる、貴殿も羅馬の士とあ
る上は、早々之を御取りあれ、
貴殿に用金を拒みし某、此心臓

を進ませせう。いで、（カサノ）飛日シーザーを討ちしが如く、此某を御討ち
あれい、ハテ貴殿には、故シーザーを尤も惡みし時と雖も、某を御思ひ
下さる、其淺き友情に比ぶれば、遙かに大なる追慕の情を、御寄せなさ
れたではムらぬか。

（カサノ） いや、其抜刀は御藏めあれ、此上は隨意に怒りを御漏らしなされ、
さらば御胸もすくてムらう、又何とても隨意の舉動をなされませい、
何の様な御舉動でも、只だ一時の出來心と、此某は見道がし申さむ、お
ゝ、カツシアス、彼の燧石を御覽あれ、激しく打てば閃電眼を突き進れ
ども、忽ちにして又素の冷靜に還るが如く、小羊同然の此某も、激すれ
ば即ち怒ると雖も、忽ち和らげば痕も留めぬ男でムる。

（カサノ） さて、此カツシアスは、天成の執拗なる氣質故に、思ひ亂れか

き亂るゝ其間、たゞ〜ブルターリス殿が笑ひの種、慰みの種とならむが爲めに、これまで生存へ來りしか。

スバル ー いや某が只今申せしことも、同じく執拗なる氣質故の、只一時の過言でムつた。

アカツシ 何と仰せらるゝ、それが貴殿の真情でムるか、あゝ嬉しや、然らば御手を下されい。(嫁和の上握手)

タプスル ー (きながら)此胸までも進ませせう。

アカツシ おゝブルターリス老兄――

タプスル ー 何事でムる。

アカツシ 外でもムらぬ、此某が愚母より傳へ受し多血なる氣性故、覺えず我を忘るゝ時にも、尙ほ御勘忍下されう程、此後とも何卒某を御愛し

下されい。

タプスル ー いかにも御愛し申さむ、以來は貴殿が此ブルターリスに對し、粗暴の舉動を致さるゝ時には、貴殿の母御が、口小言を仰せらるゝと觀念致し、決して心には留めませない。

と此時奥にて騒がしき人聲聞ゆる

詩人 (奥に) 大將達に用事がムる、御通し下され、どうやら御不和の摸様でムる、打棄て置くは宜しうムらぬ。

アルシリ (奥に) いや〜通す事は相成らぬ。

詩人 (奥に) 死すとも通らずには居らぬ〜

と詩人後よりルシリアス及びチ、ニアス登場

アカツシ ヤア〜何事なるぞ。

詩人 御耻辱てムる兩大將如何なる思召てムる御嫌なかなき和あれ兩大將これ
 程の兩雄が並び立たれぬは國家の不利よたぬハテ御兩所などよりも浮世
 の風に永らく吹かれた此某

アカスツシ ハ、アぬらくらと又しても狂言綺語を並べ立つるか、

タプスル ヤア出て失せい無禮奴。

アカスツシ 御勘忍なされブルタース殿これが此奴の癖てムる。

タプスル 癖はいかにも承知なれど時ならぬ癖は勘忍ならぬかやうな愚

物が戰場に何の用をか爲すべき痴者しやもの失せい。

アカスツシ 往ねく行きやれつ。

と詩人退場

タプスル ルシリアス、チ、ニアスの兩人には隊長に申附け今夜は此處に



『せ致露持を酒は方其スアシール』

一宿の準備を致させよ。

アカツシ して足下等是用濟次第、メツサラを伴ひ歸り來られよ。

とルシリアス及びチ、ニアス退場

タブル ルーシアス其方は酒を持參致せ。

とルーシアス退場

アカツシ いや某は老兄が、彼の様に御立腹あらむとは、思ひも懸けぬ事て
ムりました。

タブル お、カツシアス、御免あれ某は様々の憂愁に責められて、日頃の
やうにもムらぬ。

アカツシ 區々たる一時の不如意より、憂愁に陥らせ給ふとは、日頃の御悟
道も餘り御役には立たぬと見えませす。

友、山

タブル いや憂愁を忍ぶに於ては、乍不肖ブルータス、何人にも劣りは致

さぬ——御聞下され、ポーシアが死亡になりました。

アカツシ 何とてムる、ポーシア殿が。

タブル いかにも彼女が亡くなりました。

アカツシ ちえ、それとも知らず先刻の暴言、御手に懸つて御刀の露と消
えざりしは不思議の幸福、お、堪へ難き御愁傷、御察し申し上げませ
る——して如何なる御病氣にて。

タブル 一つには某が不在を憂ひ、又一つには、オクタピアス、マークアン
トニー等の勢力漸う強大なるを見——これは彼女が訃音と共に落
手致したる消息に依つて明白でムる——夫故遂に亂心致し、侍女共
の隙を覗ひ、炭火を口に銜みしとの事てムる。

アカツシ してそれ故御死亡なされましたか。

タブル 左様でムる。

アカツシ おゝ嘆かほしい事でムる。

ルーシアス 酒瓶蓋及び蠟燭を携へ登場

タブル 此話題は何卒最早御止め下され——いゝ一盞傾けませう——。

と酒蓋を取上げながら

カツシアス 殿此一盞に、此迄の不和を葬りまするぞ。

と飲干す

アカツシ 某も是非く一盞所望致す——いてルーシアス、山盛りに注いで呉りやれ、ブルータス公が、友誼を祈る訂盟の盞いか程頂戴致しても、過すと申す事はムらぬ筈。

と飲干す、ルーシアス退場

チ、ニアス、ソツサラを伴ひ登場

スタル 近う参られよチ、ニアス——ソツサラ善うこそ御出やつた——

さらば一同燈火の周囲に打寄り、大事を評議致すであらう。

とソツサラ、チ、ニアス着席する

アカツシ (旁) さてくポーシア殿には、御遠逝なされたか。

スタル 最早其噂は、何卒お止め下されい。

と、ブルータス、カツシアス兩人卓に向ひ着席

さてソツサラ、本國よりの消息に、オクタビアス、マーク・アントニーの兩人には、我等を追討の爲めと稱し、大軍を率ゐ、ヒッリツピ(マセドニ)指して早や進向致せしとある。

サノラツ 某へもさる方より、同様の消息がムりました。

アタル して其外には、どのやうな通信たよりを受けられた。

サノラツ 其外には、オクタビアス、アントニー、レビダスの三人にて、嚴法酷刑を設け、一百人の議事員を誅戮致せし赴の通信がムりました。

タブル 其儀に就きて某への通信は、少々相違がムる、即ち殺害せられし議事員は七十人、シセロも其中にありとの事てムる。

アカツシ シセロ公も其中に。

サノラツ いかにもシセロ殿も同じ嚴法に依て、殺害致されましたげにムりまする——して其御通信は夫人きさだよりの御手紙てがみてムりましたか。

タブル いや左様ではムらぬ。

サノラツ 然らば其御通信の中に、夫人の御噂はムりませぬか。

タブル 少しもムらぬ。

サノラツ ハテそれは不思議な事てムる。

タブル 何故其様なことを問はせらるゝな、足下への通信には、何ぞ彼女かのめの噂がムるか。

サノラツ いやムりませぬ。

タブル いや足下も羅馬の士なりや、有の儘に申されい。

サノラツ 據よんどころムらぬ、然らば某が申上ぐる所を、尊公にも羅馬の士らしく、忍んで御聞なされ、何を隠さう夫人には、不思議の御最期を御遂げなされました。

タブル さてはポーシア、迷はずに彼世へ往け（と一同起）死（立する）ぬに極まる人の命、我等とても一度は死ぬる命と思へば、彼女が死亡も諦め易い事

てムる。

サメラツ 偉人大難に當るの覺悟は、正さに此くあるべきでムりませう。

アカスツシ 某なども理に於ては、正さに然るべしと存じながら、いざとなれば、實踐躬行は成り兼ねます。

タプスル 「いや死人はさて置き生ける我等が此の後の、取るべき途に就き、熟と協議が悍要でムる——それに就きいまより直ちにヒヰリツピ(希臘のアセドニアに在る地名、此時アントニイ、オ)へ進軍の儀は如何でムる。

アカスツシ 其儀は某當を得たる計謀はかりごととは思ひませぬ。

タプスル して其理由は、

アカスツシ 理由と申すは外でもムらぬ、敵をして我に來らしむれば、力を費

し、兵を疲らし、莫大の損失を蒙らしめつゝ、我は靜かに兵力を休養し、防備を嚴にし、逸を以て勞を討つの大利がムる。

タプスル 但し如何なる理由と雖も、それに上越す理由がムらば棄てねばならぬが軍略でムる、御聞あれ抑もヒヰリツピの彼方より、此地に至る間の住民は、いや／＼ながら、我が軍令に従へども、とかく部備徵發を厭ひ恐るゝ様子、敵軍此地に進むの途上、彼等の間を通過致さば必ず壯丁は馳せ加り糧食を獻じ川金を捧げ、敵をして勇氣更に一倍せしめむ、然りと雖も、我若し速にフヰリツピの地に進み、此等住民を背にして戦ふならば、敵をして此大利に浴することを得ざらしむるは明なり。

アカスツシ いや御聞下され老兄。

タブル 先づ／＼某の詞を御聞下され——其上我等は、只今が味方の全力を擧りたる、頂上なるを御含みあれ、我が兵力は充實し、我が戦機は熟したるに、敵はこれより、日に／＼軍勢を増しつゝあり、峠に立つ我等が勢は、只だ下り路に向ふばかり、夫れ人事には干満の潮あり、満潮に乗ずれば、忽ち幸運の港に到るべく、若し又此機を失はば、我等生涯の船路の旅は、難船破船の憂目に終るでムらう、我等只今かゝる潮の上に漂ふなれば、此潮時が悍要でムる、さらずば大事は去りませうぞ。

アカスツシ 此上は御説の通りになされませい、早速我軍を進め、ヒヰリツビの地にて、一戦致すてムらう。

タブル 評議にいつしか時を移し、早や夜もいたう深けてムる、神ならぬ血肉の身は暫しなりともまどろまずばなりません、最早申すこと

はムらぬか。

アカスツシ ムりませぬ、さらばこれより御眠みあれ、明日は早朝寢床を出て、それより出立致すてムらう。

タブル ルーシナス、身共の寢衣を持つて参れ——(とアス退場) メツサラ、さらば——チ、ニアス、さらば——床し床しのカツシナス、さらば／＼御眠みあれ。

アカスツシ あゝ懐かしの老兄(とブルを抱きながら) 今宵は誠に心にもあらぬ喧嘩口論、御容赦下され、今後は再びかやうな邪心は抱きませぬ、何卒老兄にも。

ルーシナス 寢衣を携へ登場

タブル 其氣遣は無用でムる。

アカツシ　さらば御寝なされませい。

マスル　御眠みあれ賢弟。

メチ、サニラス　御寝なされませブルータス公。

マスル　何れもさらば――

とカツシマス、チ、ニアス、メツサラ退場

ルーシアス寝衣を此方へ――さて其方が琴は何れにあるな。

アルス　此天幕の内にムりまする(氣にも眠た)

と琴を取りに行き直ちに携へ還る

マスル　ても其方は眠さうな口のきゝやう、乍去思へばそれも道理く、

連夜の疲勞が出たのであらう、クラウデアス及び其外誰ぞ一人、身共が召使の僕(しもべ)を呼寄せい、今夜は此天幕内に眠(やす)ますると致さう。

アルス　ヤイ、アローにクラウデアス、御前の御召ぢやぞや。

とアロー及びクラウデアス登場

アロー　召しましたか御前。

マスル　おゝ其方共、今夜は此處に眠んで呉りやれ、後刻カツシアス殿への用向にて、其方共を喚び起すやも測られねば、

アロー　いや眠む迄もムりませぬ、此まゝ御用向を御待ち申すてムりませう。

マスル　いや其まゝ待ち居るには及ばぬ、眠むが宜いぞ、用向とても中止致すやも測られぬ――ルーシアス、見やれ、先刻尋ねた書物がこゝに在る、身共がいつか寝衣の衣(か)へ入れ置いたと見える。

と二人の僕は横風し眠りに就く

アルスィン さればこそ、私が御預り申した覺えはムリませなんだ。

タプスル 許して呉りやれ、身共は物忘れを致してならぬ、さて其方は大儀

ながら暫く忍んで、一曲二曲、絃の音を聞かせて呉りやらぬか。

アルスィン 畏りました、御意にさへ叶ひますれば。

タプスル 其方が絃の音は、いつとても身共が意に叶はぬ事はない、いや俺

ひ立てゝ氣の毒なれど、其方が忠實しき奉公振嬉しいぞよ。

アルスィン それが私の義務でムリまする。

タプスル とは申せ、其方の身に應ぜぬ義務を、申付けるは身共の誤り、若き

者の眠りを貪るは承知の身共。

アルスィン 私は最早眠りましてムリまする。

タプスル 宜うこそ、乍去此上又眠むが宜い、長くは引留めぬぞ、あゝ此

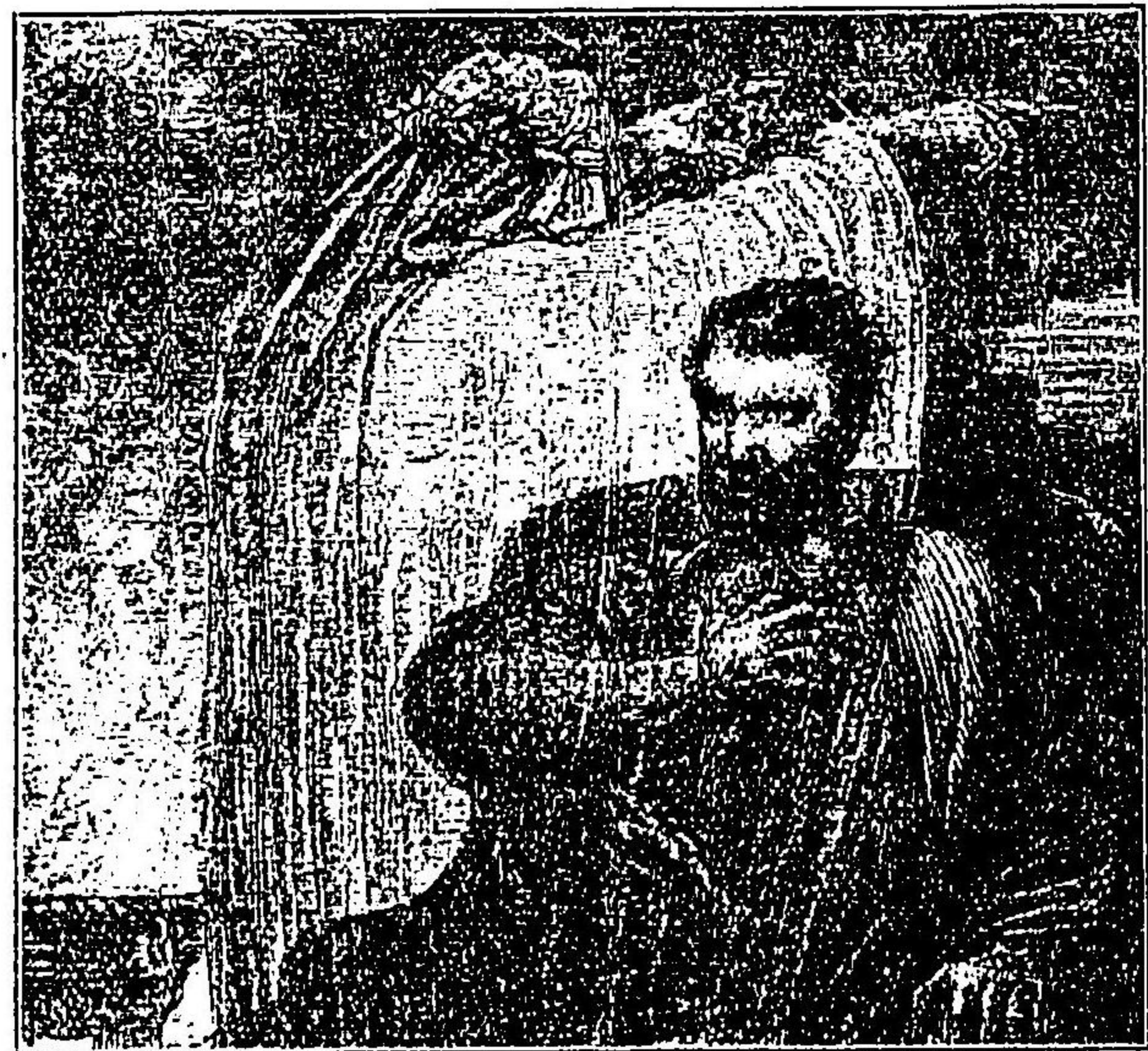
後とも、身共若し世に生存へなば、必ず其方の力になつて遣はずぞよ。

とルーシアス座して琴を弾じ始むる、但し間もなく琴を抱きしまゝ眠り入る

いやこれは眠たい調子ぢや——あゝ睡魔奴が、重い、鉛の棒を、絃を弄ぶ小童が、頭の上に載せたと見える——此上は呼び覺して罪は作らぬ、乍去此儘棄て置かば、頭の上にて、琴を破るであらう、いで琴を取つて遣はさう。

とルーシアスの手より琴を取りて下に置く

これで宜い、ゆるりと眠め——さて何と致さう——あゝ此書物は読みさしの紙面が折返してはあらぬか、ウム此處であらう。



「……者何はるなれそやや……」

と腰を下す
時にシーザーの幽霊現れ
出る

ハテ此燈火の次第に暗く
なり行くは——やゝそれ
なるは何者、さては我が眼
の疲れにて、かゝる怪異も
見ゆるなるか。

と幽霊次第に近寄り來
る

フム次第に此方へ近寄り

參る——さては我眼の迷ではないか、神か天使か抑も魔か、我が血脈
を冷やかならしめ、我が毛髮を逆立たしむる不思議さよ——何物な
るぞ語つて聞かせよ。

靈 我こそは汝に仇なす魔

タプル 何故此處へは現はれしぞ

靈 フ非リツピの原頭にて、汝と相見むことを告げむが爲め

タプル 然らば重ねて再會を期せむとな

靈 いかにもヒ非リツピの戰場にて

と幽霊消失する

タプル よしく、さらばヒ非リツピの地にて、重ねて汝に見參致さむ——
え、勇を鼓して奮ひ起たむとすれば、いつの間にやら消え失せしな

何、我に仇なす魔性の者とか、よし我汝と語りたき事あり——誰かあ
る、ルーシアス——ワロー、クローデアス、何れも起きよ——
クローデアス。

アルスシ 御前様、絃の調子が弛みましてムリます。

タプスル 一ハ、ア、まだ琴を弾き居る心意ぢやな——ヤイ、ルーシアス目を

覺せ。

アルスシ (前に進み出で) 何御用でムリます。

タプスル 一ルーシアス、其方は今夢中に聲を立てたが、何の夢を見やつたぞ。

アルスシ 私は聲を立てた覚えはムリませぬ。

タプスル 一いや聲を立て居つたが、何を其方の目に見えた物はないか。

アルスシ 何も見えた物はムリませぬ。

タプスル 一 然らば又ゆるりと眠め——ヤア、クローデアス——目を覺ませ

ワロー

ソロ 一 御召なされましたか御前。

タプスル 一 何御用でムリます。

と兩人起上り進み出る。

タプスル 一 外でもない、其方共は何故只今夢中に聲を立てた。

ウソグ 一 さては聲を立てましたか。

タプスル 一 いかにも聲を立てた、何ぞ目に見えたか。

ソロ 一 いや何も見た覚えはムリませぬ。

タプスル 一 私とても見た覚えはムリませぬ。

タプスル 一 さらば宜い、其方共は今よりカツシアスの陣屋へ赴き、一足先へ

御軍勢を御繰出しなされ、然らば我等も續いて出發致すと申して參
れ。

ラアウロク 畏まりました。ムリます。

と一同退場

第五幕

第一場——ヒ非リツビの平原

オクタビアス、アントニー及び部下の軍勢登場

オクタ いかにかにアントニー殿、御覽あれ、某が推察通りになつてゐる、兼て
貴殿の仰せには、敵は必ず丘陵峻要の地に據り、此方に推寄せ來るこ



オクタビアス、アントニー及び其軍勢

とは萬々あるまじとの事てゐつた
が、今や敵軍は間近に迫り我より推
寄せ行くを待たず、此處ヒ非リツビ
の地を以て、戰場となさむ所存の程
明白と相成つたり。

アント いか敵の真意は某とくに洞見
せり、眞實に此處に推寄せ來るは、素
と彼等の本意にあらねど、内心の畏
怖を外觀の勇氣に包み、兵を示して
我等が心に、士氣大に奮ふが如く、思
はしめむの計略てゐる、中々以て眞

實左様の勇氣はムらぬ等。

注進の使者登場

使者 大將達御用意く、敵は武威勇ましげに只今推寄せ参りまする、ま

つた燃ゆるが如き猩々緋の陣羽織を陣頭に高く推立てたるは、直様

何ぞ致す所存と見えませす。(赤き目標を掲ぐるは、大決戦を意味すとぞ)

ニアント オクタピアス殿、此上は貴殿の軍勢を、此平野の左翼に徐ろに御

進めなされい。

ピオクスタ いや某は右翼へ討つて出てませう、貴殿左翼へ御進みあれ。

ニアント ハテ今此大事の瀬戸に臨み、何故貴殿は某に抗はる。

ピオクスタ 別に貴殿に抗ふ譯ではムらぬ、たゞ某はさやうに致す所存でム。

軍鼓の響にてアルータス、カツシアス及び其率うる軍勢其他ル

シリアス、チ、ニアス、メツサラ等登場

タアルー 敵軍彼處に佇み居るは、さては我等と問答致したい冀望と見ゆるな。

アカツシ チ、ニアス殿、足下は此處に三軍を停めて御控へ下され、我等は

これより進み出で、敵と問答致すてムらう。

ピオクスタ マーク・アントニー殿、進撃の合圖を致しませうか。

ニアント いやオクタピアス殿、敵の進撃を待つて、應戰致すも遅くはムら

ぬ——先づく前へ御進みあれ、敵將共には我等に對し物云ひたげ

の風情でムる。

ピオクスタ (軍隊に)合圖を致すまで停り居れ。

タアルー いかにか敵將に物申す、先づ干戈を交す前に、詞を交さむ所存なる

か。

ピオクスタ 但し我等は足下等如く干戈よりも詞を好むが故にはあらず。

タブル 一 オクタビアス承れ、善き詞は悪き干戈に優れるものぞ。

ニアント いやブルータスに物申す善巧方便の詞を以て悪逆の刃をいひくるむるとは足下が事故シィザの御胸を刺しながら、ジュリアス公萬藏ばんざうと呼ばつたを忘れはせまい。

アカスシ ヤア、アントニー、足下が腰の物の切れ味は、未だ世間に知られざれども、足下が口先にはハイブラシィ、ハリ、島中の一市にて蜂蜜の産地として名高しの蜂共より貯藏の蜜を悉く奪ひ取つて、附けた程の甘味がムるな。

ニアント 其上刺さをまで奪ひ取つて附けは致さぬか。

タブル 一 いかにも蜂共が刺さを奪ひ、其上又聲をまで奪ひ取つて、我物とせ

られし様子、さればこそ、足下は人を刺さむとするに臨み、先づブンクと鳴き廻つて、詞で嚇さるゝは、さて抜目のない事かな。

ニアント いや逆賊奴等、汝等の毒刃は、聲をも立てず不意打に、故シィザを刺せしならずや、汝等は猿の如く齒を露はして笑を作り、狗の如く尾を掉つて媚を呈し、奴隸の如く腰を屈め、故公の足を舐むる刹那、卑怯にも後より忍び寄りたるカスカ奴が、初太刀に御頸を打ちしよな、え、汝犬共が。

アカスシ 犬共ぢやと——ちえ、ブルータス殿、かゝる耻辱を見るも、貴殿の御説に従ひし故、愚案通りに致せしならば（即ちシィザを殺害の當時に）、かゝる無禮の言は吐かせまいに。

ピオクスタ 詞合戦無益々々、問答は汗の滴、勝敗は血の滴に依つて決すべし。

見られよ——某は逆賊共に對しかう拔劍致す、此劍の鞘に收まるはハテ何時と思ふ——故シザーが三十三の傷口の仇を返したすまて、さらすは又一人のシザーが(白かす)逆賊の刃故、返り討に合ふ迄は、いつかないかな納め難し。

タブルー 聞かれよシザー、足下が軍中に携ふる、逆賊の手に懸らば知らず、我等と雌雄を決せむ爲めに、逆賊の手に懸る憂はムらぬわ。

ピオクスタ いかにも左様な憂はムらぬ、ハテ此拙者は、ブルータス輩の刃に懸り、死ぬる爲めには生れて來ぬぞや。

タブルー いやさ足下が如何なる槐門貴族の子弟なりとも、ブルータスの刃に懸り死ぬる程、名譽の最期は遂げられまいに。

アカスツシ 酒宴遊興に身を持崩す、放蕩者(アを指す)に語らはれた阿呆殿、二

才殿いかで其様な名譽を受くる資格がムらう。

ニアント ヤア、カツシアス、まだ昔の大言が止まぬと見えるな。

ピオクスタ お止しなされアントニー殿——いかに逆賊共、此上は干戈を以て勝負を決せむ、今日戦ふの勇氣あらば、今より直ちに戰場へ出馬致せ、若し其勇氣なきに於ては、何時なりとも汝等が、随意の時に推寄せ來れ、相手を致し遣はさむ。

とオクスタピアス、アントニー及び其軍勢退場

アカスツシ いて此上は風も吹け浪も荒れよ、我が乗る船よ躊躇ふな、嵐は既に吹きそめたり生死の瀬戸際は今なるぞ。

タブルー 嗚々ルシリアス、足下に一言申す事がムる。

アルスシリ 何事でムる。

とアルーマス、ルシリアス兩人一隅に離れて相語る

アカツシ メツサラ殿く。

サメツ 何御用でムる大將。

アカツシ 聞かれよメツサラ、折しも今日は某が誕生日、今日の此日を以て

カツシアスは此世に生れ出でた、おメツサラ、改めて握手を許せ、後日の爲め足下に申置きたい事がムる、外でもない、某は心ならずも、一國の自由を、此一戦に賭するの、止むを得ざるに至りしもの、彼の大ボムベイが古へも坐ろに想ひ遣らるゝ事てムる、足下も兼て知らるゝ如く、元來某は、エビキュラスの學派なぐれを酌み、吉凶禍福の兆候などは、心にも留めざりしが、今は昔に變り何とやら、物の兆などに幾分此胸を騒がさるゝ心弱さ、此度サルヂスより進軍の途上、陣頭に立てたる軍

旗の上に、大鷲二羽舞下りて又去らず、兵士が手より、食物を貪り食ひなど、馴々しく此のヒカリツビ迄伴ひ來りしが、今朝に至りて何れへか飛び去り行方知れず、後には鴛鳥群がり來りて、我軍陣の上を飛翔し、善き餌食ネヅメごさんなれと、云はぬばかりに見下せば、彼等が羽影は、いとも恐ろしの天井にて、其下に打臥す我が軍は、やがて滅び失せなむ前兆にはあらざるかと、案ぜらるゝ事てムる。

サメツ 左様な事がムりませうや。

アカツシ 元より某とても、悉くは信じませぬ、いつも元氣は失せぬ某、如何なる難事にも、臆せず當る覺悟でムる。

アカツシ (ルシリアスとの談話終りし様子にて) 其通りてムるぞ、ルシリアス。

アカツシ さてブルータス殿、今日の戦争も神助に依つて勝利を得、お互に

未長う、平和の月日を陸まじう、送りたきは山々なれど、測り難きは人事の常てムれば、逆じめ萬一の謀を語らひ置くが、肝要てムりませう。されば若し此度の戦争、我等が敗北に歸する時は、かく御面談を致すも、大方これが最後でムらう、愈よ其時貴殿に於ては、如何なさらう思召てムる。

カスル されば、天命に逆らひ自殺を遂げたる故、カトールを、某難詰致せしことあるは、足下も御承知の通りてムる、同じ教理の表に依り(ストイツ)何とやら某は、將來を恐れ慮かるの餘り、人事を司る天命を待たむが爲め、殊更に忍辱(忍辱)の力を養ひ、死期を測り、身後の計を爲すは、卑怯未練の舉動と考へ申す。

アカツシ 然らば萬一、此戦争に敗北致さば、貴殿は捕虜となつて、羅馬の市

中を引廻はさるゝ御量見か。

カスル いや左様ではムらぬ、カツシアス(カスル)苟も此ブルータス(ブルータス)羅馬の辻に縛目の浮耻を暴さうとは思ひませぬ、しかすがに左様にさもしい心は持ちませぬ、乍去ともかくも、去る三月望の日に、我等が創めたる大業の終局を見るは、今日の中、但し重ねて再會の期ありや否やは不明でムれば、只今此場に於て永訣の禮をかはし申さむ、いざさらばカツシアス殿、これが此世の訣別でムる、さらば、若し幸にして再會を得ば、ハテ其時は破顔微笑して相祝せむ、若し又其事なき時は、よくぞ交換(交換)せし今日の永訣と、遺憾なく思ふてムらう。

アカツシ さらば、ブルータス殿、いかにも重ねて再會の機を得ば、破顔微笑して相祝し申さむ、若し又其事なきときは、實によくぞ交換(交換)せし

今日の訣別、思ひ置く事もムるまい。

タスル　ハテ然らばこれより出發あれい——あゝ人間の身を以て、今日の成行を豫め知り得む法もがな、とは申せ、日は自つと暮るゝが習ひ、其上にて、成行は判明致さじ——さう——一同参れつ。

と喇叭の音にて退場

第二場——戰場

敵襲を告ぐる警聲にてブルース、メツサラ登場

ブルース　いざ／＼メツサラ、馳せに馳せて、此書附を左翼の軍(カッシアス)へ御届けあれ、さて彼の一軍を以て直ちに攻めかゝる様致させたい。と申すは、敵軍の右翼なる、オクタピアス軍を見亘すに、意氣銷沈の條

がムる、此機を外さず、不意に起つて攻めかゝらば、勝利は期して待つべきのみ、いざ／＼メツサラ、馳せ付けよ、さて一軍總がゝりを以て責め寄せよ。

と一同退場

第三場——戰場の他の方面

敵襲の警聲、大鼓喇叭、圓の聲にて、手に鷲印の旗を携へたるカッシアス及びチ、ニアス登場

カッシアス　アレ見よチ、ニアス、味方の弱武者共が逃るわ／＼、今は味方の軍勢が某に取つては當の敵となれる淺ましき、これなる軍旗を携へし旗手(はたき)も、敵に背を向け逃げそめしを、某手つから斬り棄て、彼が手

より奪ひ取つた次第でムる。

アチスニ お、カッシアス殿、これも畢竟ブルータス殿が、號令早きに失した爲め、オクタピアス軍の隙を見て、餘りに急いたが過失の元、まつた我が軍兵は、アントニーが圍む所となりしも知らず、ブルータスが部下の兵は、分捕功名に心を奪はれ、一人の援兵をも、送り越さざる無情の舉動。

と響聲、軍鼓圓の聲聞ゆるビンダラス登場

ラピスダ 御逃げなされ、我君、御逃げなされ、マーク・アントニーが軍は早や、我軍の陣地を占領致してムる、カッシアス殿もつとく遠方へ御落ちなされ。

アカスシ いや此丘で十分(と軍旗をピンダラスに)アレ見られよチ、ニアス、

彼方に火の見ゆるが我軍の陣地なるか。

アチスニ いかにも左様でムる。

アカスシ いやチ、ニアス、足下は何卒某が馬に騎り、一撻當て、彼方に見ゆる、軍勢の間近に馳せ寄り、味方の勢か敵勢か、とくと見定め参られよ。

アチスニ 畏まりましてムる、東の間に見届け参るでムらう。

とチ、ニアス退場

アカスシ さらばビンダラス、汝は此丘の頂に登りチ、ニアスの行衛を見張致せ、又戰場の様を一々報告せ呉れよ、予は眼力滯きに依り、かくは汝に依頼致す。

とビンダラス丘に登り行く



今四方より攻めかかるるに騎馬の兵を以て取圍まれ、今四方より
来るすまりて所るるちかめ攻りよ方四今

想へば今月今日を以て、此世の
光を見し某、天運循環して、此生
を終るも今月今日、某が命數も
早や是迄——ピندگانラス、模様
は何と。

ラピ
ス
ン
ダ
(丘より上)お、我君。

アカ
ツ
シ
何と致した。

ラピ
ス
ン
ダ
チ、ニアス殿には、騎馬の
兵を以て取圍まれ、今四方より
攻めかゝらるゝ所てムります
る。なれどもチ、ニアス殿には、

まつしぐらに馬を進めまする——ヤア、やがて愈よ追付かれまする
——ヤア、チ、ニアス殿が——ヤア、馬を下りた者もムる——お、チ
、ニアス殿も下りました——ちえ、生捕られましたわ——アレ御
聞きなされ、敵奴が勝鬨を挙げまする。

と遠方にて聞の聲喇叭の音聞ゆる

アカ
ツ
シ
下りよピندگانラス、最早見張には及ばぬ、あゝいつまで生存へて
味方の將士が我面前にて生捕らるゝを見てあらうぞ、我ながら卑怯
千萬。

とピندگانラス丘を下り来る

此處へ來いピندگانラス、當初バルジア(小亞細亞の地名)の戰場にて、予が汝を
生擒なしたる時、汝が命を許す代償に、某が命ずる所を、何事にてあ

れ必ず違奉致すべしと、一旦誓約致せしを、よも忘れは致すまい、今こそ其誓約を果した上、自由の民となるがよい、外でもない、これ此劍は、故シーザーが躰内の血液を^く滲りし名劍、汝之を取つて、某が胸を刺しやれ、いやさ口答は聞かぬ、いざ、早う柄を握れ、さて予が此様に顔を掩うたなら、それを合圖に刺し透せよ。

とビンダラス劍を取る、カッシアス自ら身を其上に投かけて倒れる

これにてシーザーが恨も晴れるてあらう、公を刺したる其劍で、死するといふも逃れぬ因縁。

と息絶ゆる

ビンダ さて、これにて、此身は自由の身となつた、とはいへ、たとひ自

由の身とはならずとも、心にもない^{せした}酷らしい、かやうな役目は致したうもなかつたわい——お、カッシアス様、これより此ビンダラスは此國を遠く、後にして、羅馬人の目に留まらぬ、邊土の果に走り隠るゝて、ムリませう、さらばで、ムる、お許し下され。

とビン退場、敵襲の警聲聞ゆる

頭に桂冠を戴けるチ、ニアス及びメッサラ登場

サメラツ 想へば此度の戦争は、勝敗の交換^{とりかへせ}とも申すべし、オクタビアス勢がブルータス勢に敗らるれば、カッシアス勢は、アントニー勢に敗らるる、アチハニ 乍去、此勝報^{タスル}の聞かれたなら、カッシアス殿にも、嘸かし喜ばれて元氣付かるゝ事て、ムらう。

サメラツ してカッシアス殿には、何處に御在^おあるな。

アチスニ 奴隸のビンダラスと只だ二人此丘の上にいたう萎たれて入らせられませう。

サメラツ (カシッアスの屍骸を認め) ヤ、彼處の地上に横臥せるは、カッシアス殿ではムらぬか。

アチスニ どうやら生ある者の、臥したる姿とも相見えぬ——や、一大事。

サメラツ カッシアス殿ではムらぬか。
アチスニ いやカッシアス殿は、早や此世に在されぬ、これなるは、カッシアス殿が昔の名残——あゝあの西に春く夕陽の、茜さす光の中に、闇夜の陰に沈み行く、先づ其如く、紅の血潮の中に、カッシアス殿が此世の日影は暮れ果てたり、羅馬の日輪は没し去つたり、我等が旅路の日も暮れたり。此上は雨も降れ、露も下りよ、如何なる危険も来らば来れ、我

等が此世の宿縁も早や盡き果てたり、某が承はりし使命の程を、危み疑ふの餘り、カッシアス殿には、かゝる椿事を仕出されたものと見ゆる。

サメラツ 吉報到来を危むの餘り、かゝる椿事を仕出されしか、あゝ疑念が生み出づる忌々しの過失、あらぬ幻影を人の心に見するとは、さるにても胸に一點の疑あれば、芽ぐみ易きは過失の魔、此魔一度芽をふく時は、根幹共に枯死の危難は免れず。

アチスニ ヤイ、ビンダラス、ビンダラスは何處に居るぞ。

サメラツ チ、ニアス殿、貴殿はビンダラスを御探しなされ、其中某は、ブルータス殿の馬前へ馳付け、此凶報を以て御耳を貫き申さむ——嗟乎ブルータス殿の御耳には、太刀劍の毒刃より、此凶報で抉らるゝが、遙か

に辛い事^{ツラ}でムララ。

アチスニ 然らば御急ぎなされメツサラ殿、其中某は、ビンダラスが行衛を尋ねませう——

とメツサラ退場

え、口惜しや、カツシアス殿には、何故某を御遣はしなされた、某は首尾克く味方の勢に、出遇うたではムらぬか、さて彼等は、此勝利の証を某が額に載せ、歸つて之を貴殿に贈るべきやう申されたではムらぬか、其時彼等がどつと挙げたる、歡喜の叫び聲を、御聞つけはなされぬか、嗟乎、貴殿は萬事を思ひ迷ひ遊ばされた、乍去^さ此冠^{かんむり}は、御額に御受けなされ、ブルターヌ殿より、貴殿に進らせよとの御頼みてムれば、某は其通りに致しまする——此上はブルターヌ殿、急いで此處へ御

出の上カイアスカツシアス殿に對する、某が誠忠の程を御覽下され——お、神々も御容赦あれ——こは羅馬武士の習ひてムる、いざカツシアス殿が劍を以て、チ、ニアスが胸も此通り、

と白刃して死する

敵軍の聲にてメツサラを先頭としアルーダス、小カト、ストラト

一、ザナラムニアス、ルシリアス登場

メツサラ さてメツサラ、屍骸は何處にあるな。

サメツ 御覽あれ、彼處^{あそこ}にムります、チ、ニアスが傍^{かたはら}に哭し居ります。

カト ヤ、チ、ニアスが、仰向に伏し居るは、

メツサラ 何者にか殺害せられしならむ。

カト さてこそジュリアス・シーザーが、威力は今尚ほ衰へず、魂魄此世

に留まりて、我等が剣を、我から我が胸に向はしむるか、

カト さるにてもチ、ニアスがいみじき舉動、御覽あれ、彼の桂冠を死せるカツシアス殿が、頭に載せ置かれしは、逆れく。

タプスル あ、此二人ほど、健氣けんきなる羅馬武士が、今の世に又とあるべきか、あ、羅馬武士の名残とも申すべき御兩所、これが最後の見納めか、將來とても羅馬の地にか程の勇士が又現るべしとも思はれず——あ、方々、某が故人に對する情誼の程は、かばかりの涙で泣き足る程の仲では、ムらぬ——乍去此陣中、危急の際、いつ迄悲嘆に暮るべきならず、カツシアス殿、何れ其折もあるでムらう——方々には、それ故早速此遺骸を、一先づサッソの島（近傍なるエーッ）へ御遣し下され、陣中に葬送を營みなば、我軍の銳氣を挫くてムらう——いざルシリアス

——カト、戰場へ罷り越さむ——ラベオ、フラピアスの兩將に、これより進撃を致させませう——最早や時刻も三時でムる、此上は日没前に再戦を試み、我等が最後の武運を試めすてムらう。

と一同退場

第四場——戰場の他の方面

敵襲の警聲にて、兩軍の兵士入亂れて、戦ひながら登場、続いてブル、マス、小カト、ルシリアス等登場

タプスル ヤア、物共盛返せく。

カト 何處の卑怯者が逃げ走るぞ、心あらむ者は拙者に續けく——敵の奴原承れ、我こそは、マーカス・カトが一子なるぞ、國民の忠友、虐主

の敵、マーカスカトールが一子を知らぬか。

と敵兵を斬りまくる

ブルース して又我こそはブルータス、同じく國民の忠友、マーカス・ブルースなるぞ、ヤア、ブルータスが手並の程思ひ知れ。

と敵を迫りながら退場、此時カトールは力盡きて倒る。

アルシリ ち、健氣なるカトール殿、見受くる所御最期か、チ、ニアス殿に劣らぬ立派な御最期、大カトールの御一子と申し、御名は末代に残るてムらう。

甲敵兵 (アルシリ) 降参致せ抗うたら命はないぞ。
リルアシ よい、死ぬ爲めに降参致して遣す、又之を遣すに依つて、少しも早う拙者を殺して呉りやれ。

と金錢を與ふる

かく申す拙者はブルータス、早や、ブルータスが首討つて、汝が功名に致せ。

甲敵兵 いや、首は討たれぬ——大切の生捕者。

乙敵兵 それアントニー様が御出なされた、ブルータス生擒の赴を言上致せ。

甲敵兵 いかにも言上致さう——ホー大將にはよろこそこれへ、
とアントニー登場

我君に言上致しまする、敵將ブルータスを生擒致してムる。

ニアント ヤー何としてそれは何處にある。

アルシリ いやアントニー、ブルータス殿は至つて安全の場所に居らせら

る、ハテ彼のブルータスとも云はる、御方が、おめく敵の生擒に
なるものか、え、左様な愛さ耻は、神々も御擁護あつて、何卒彼公が御
身の上に下し給はるな——よしや彼公が、足下等の目に觸れうとて、
生死共に、ブルータスの名に背かざる、天晴の舉動を、致されぬ事のあ
るべきか。

ニアント (兵士等) ヤア物共、折角の功名ながら、これなるはブルータスには
あらざるぞ、乍去ブルータスにも劣らざる、天晴の獲物なれば、其方共
大切に預り置き、親切を盡して遣はせ、え、かやうなる天晴の武士を
拙者は味方に持ちたいわい——いざ其方共、此上は更に進んで、ブル
ータスの生死を尋ねよ、又オクタビアス殿の陣屋へ赴き、戦の模様を
巨細に言上致せ。

と喇叭の聲子にて一同退場

第五場——戦場の他の方面

ブルータス、ダルダニアス(アルが従僕)、クリタス(全上)、ストラト(全上)、ゲナラムニ
アス登場

クアスル 打漏されの郎等共、暫く此巖の上に息を休めよ。

タクスリ さるにても彼のスタチリアス殿には、味方の將卒が、最期の様をも
見届くべく、戦場指して出行かれ、兼て約束の松明を、一度は振上げて、
味方に合圖を致されしが、未だに御歸りなされぬは、大方捕はれたか、
討死致されたものと見えまする。

タブル 下に居よクリタス、我等が命數の盡る所は、討死より外に道もな

いわ、いやクリタス、申聞けたい事がある。

と何事かクリタスに耳語く

タクリ 何と仰せられまする、我君、何の様な事がムればとて、そればかりは、

御受け致されませぬ。

タブル 然らば黙り居らう、一言も申しては相ならぬ。

タクリ 私は寧ろ自害致して失せたくらうりまする。

タブル おゝ然らばダルダニアス。

とダルダニアスに耳語く

ニダルダ 此私に左様な事が成りませうや

タクリ コレ、ダルダニアス。

ニダルダ おゝ、クリタス。

タクリ 我君には何の様な難題を仰せられた。

ニダルダ 我君を殺せよと仰せられた、アレ見よ彼の様に御奮ぎ込みなされておや。

タクリ 彼の氣高い御身軀中に、御憂悶が充ちて、御眼の縁迄溢れてムる。

タブル ヴララムニアス殿、申入れたい事がムる、近う寄つて御聞下され。

ニガララム 何御用でムる。

タブル 餘の儀でもムらぬ、御聞下され前後二回——忘れも致さぬ、前にはサルデスの陣中にて、後には此フホリツビの戦場にて、遂昨夜の事でムる、大シーザーの亡霊が、夜陰に乗じて、某の面前に現れました、それやこれやを思ふにも、所詮盡きたる某が命數。

ニガララム いや左様な事はムるまい。

カスル 某は確しかと疑ひませぬ、足下とても、世の成行く様を、早や御覽なされたてムらう、我等は早や九死の淵に、追詰められた者てムる。

と微かなる警聲聞ゆる

今更逡巡躊躇して、敵に押落されうよりは、我から跳り入るが上分別、
ヅララムニアス殿、足下はよもや御忘れあるまい、足下と此某とは、相携へて寺小屋通ひを致した事もある竹馬の友、其昔の友誼にめて、
某足下に御願がムる、と申すは此劍の柄を握つて、何卒走りかゝる某の胸に御當て下されし。

ニヅアラム いや、それこそ友誼を知る者の、御受け致さるべき筋ではムらぬ。

と警聲尙ほ聞ゆる

カスル 御逃げなされ我君、いつまで御逗留あるべき所ではムりませぬ。
カスル 其方はこれより、何處へなりと落ち延びよ、之が此世の暇なるぞ

——又其方にも同様なるぞ(これはガルドニア)——
ヅララムニアス、足下にも同様にムる——さてストラト、汝は今迄眠り居りしな、汝にもこれが永訣ぞや——想へば何れも永年の間、某に對し一方ならぬ厚誼の程、嬉しとも嬉しとも申様もない、我ブルータスは、今日戦に敗れたりと雖も、不義の勝利に誇り驕れる、彼のオクタピナス、并にマクアントニー等が、及びもつかぬ名譽はなれをば、後代に残すてムらう。さらば何れも健固て參れ、ブルータスが否は、これにて一生の歴史を語り盡したり、我眼の上に永開の夜は暮れかゝれり、今日の最期を見む爲めに、此一身を支へ來れる我骨は、永劫の寢床に急ぐなるを。

警聲 奥にて『お逃げなされお逃げなされ』と叫ぶ聲聞ゆる

タクリ お逃なされ我君、一先づこゝを御落ちなされませ。

タプスレ 然らば其方は先づ逃げよ、拙者も後より追つかうぞ。

とクリタス、ダルクダニアス、ヴァナリムニアス退場

さてストラト、汝は主の側に留まり呉れよ、兼ねく心懸の殊勝な奴、汝が生涯は、義を以て一貫致せしよな、此上の依頼には、身共が剣を確と握り、暫らく面を外に向け居よ、身共は奔りかゝつて生害致さむ、何とてあるぞストラト。

ラスト ア、是非もムりませぬ、然らば先づ御手を下さりませう(最後の握手を許)さらば我君、これが御訣別(わかれ)てムりまする。

タプスレ 達者で過ごせストラト——此上は、シーザー亡靈も、此世の妄執

を晴らし候へ、涙を吞んで貴殿を刺したる此某、只今心よく自害を致して果てまする。

とストラトの持する劍に奔り懸つて自ら刺し死する

警聲 退軍の喇叭にてオクタビアス、アントニー、メツサラ、ルシリアス及び軍勢登場

ピオアクスタ 此處(こゝ)に居るは何人なるぞ。

サメラツ 我君ブルータス公の僕(しもべ)でムる——ヤア、ストラト、我君には何れに在すぞ。

ラスト 我君にはメツサラ殿、浮世の人の束縛(むすわ)を、御遁れなされてとムる、勝ち誇つたる敵人も、御亡骸(なきがら)を焼くより外に道もムるまい、ハテ我君には御生害、今は討取り奉つて、功名に致す敵もムるまい。

アルシリ　さもあらむく——嬉しやブルータス公、さてこそルシリアス
が先刻の詞に間違ひはムらぬ。

ピオクタ　さもあらばあれ、從來ブルータスに事へし輩は、拙者悉く召抱へ
て、家臣となさむ心組、先づ汝は(スト)拙者に事へて、餘生を送らむ心
はなきか。

ラスト　メツサラ殿より私を御推舉下されうならば、それは兎も角もてム
りまする。

ピオクタ　然らばメツサラ、左様致して呉りやれ。

サメラ　先づストラト、我君が御最期の模様は何とであるぞ。

ラスト　私が御剣を持ち居る所へ、我君には奔りかゝつて、御果てなされま
した。



「武馬羅るたげ上見はスターラがな敵ばへ想ああ」

サメラ　オクタピウス殿、然
らば君に對して最後

迄、御奉公を致した此
者、何卒御家臣に御召
抱え下され。

ニアント　あゝ想へば、敵な
がらブルータスは、見
上げたる羅馬武士、餘
の逆徒共は、たゞ
シーザーに對する私
怨より、彼の様な大事

をもたくらみしに、ブルータス一人は、私怨、私慾の爲めならず、國家を
思ふの一念よりこそ、一味徒黨にも加りたれ、一代の行爲は公明正大、
其人となりは造化の神も、宇宙八紘に呼號して、これこそは大丈夫な
れ」と、誇らはしげに見えさせ給ふ。

ピオクタ 其高德に相應はしう、禮を盡し儀を厚うし、葬送の式を營むやう、
我等に於て計らひ申さむ、今夜はともかくも、某が天幕の中に遺骸を
安置し、武將の禮を以て、萬端鄭重に扱ひ申さむ——いで此上は、一同
戎衣を解いて、休息致すやう布告致し、今日の此日の名譽をば、一軍に
願つて凱旋致さむ。

と一同退場

幕

明治四十年八月七日印刷
明治四十年八月十日發行

シ—ザ—
定價金九拾錢

沙翁全集

著者

戸澤正保
淺野和三郎

發行
者兼

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地

代表者

事務取締役 宮川保全

發賣元

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
大日本圖書株式會社
大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
大日本圖書株式會社支社

大日本圖書株式會社出版圖書特約販賣所

北海道 河上商店。川南。軒文舎。二堂。宮寶堂。**東北** 地球堂。森江。森江分店。寶文館。杉本。文林堂。水野。中。林平。丸後。青野。中四屋。杉村。有隣堂。中央堂。松色。大倉。金朝。北隆。三友。播磨屋。内山。東海堂。文會堂。池田。其明堂。二松堂。高山房。山岸。**關東** 弘集堂。田沼。丸屋。正心堂。**關西** 高桑。高橋。磯波。野島。西村。中山。萬。堂支店。北光社。日馬。山本。柿村。越佐同盟書館。**四國** 水野。いろは堂。尚古堂。**近畿** 淡乎堂。淨觀堂。木田。多田屋。**山陽** 此河。明文舎。川又。大塚園。寺田。南龍堂。高木。宮田。**山陰** 内山。永樂屋。平石。青木。川湖。水東。**山形** 吉見。谷崎屋。古澤。三原屋。大石。**北陸** 柳正堂。**石川** 那文堂。那文堂支店。住。日新堂。水學堂。小林。朝陽館。四澤。四澤支店。盛文堂。丸山。**富山** 藤崎。松榮堂。**福井** 虎屋。陽文堂。上野屋。港堂。佐藤。近藤。文明堂。**滋賀** 青霞堂。今泉。今泉支店。伊吉。**岐阜** 盛文堂。日向。牧野。相原。入文字屋。**愛知** 昭堂。東海林。藤崎。大澤。**京都府** 中田。學海堂。**大阪府** 林。文港堂。松田。南波。**和歌山** 中村。岡島。金川。中川。柳原。小谷。松村。閉盛館。寶文館。前川。丸後。田中。三宅。石田。北村。本田。中井。竹内。**奈良** 熊谷。石田。福浦。竹内。木村。榮師寺。西村。中井。**和歌山** 虎與鏡。集英堂。**三重** 安司。**滋賀** 文進堂。文進堂支店。敬份齋。**滋賀** 川内。品川。中村。**滋賀** 宇都宮。近田。**滋賀** 徳岡。今井。久松堂。安達。**滋賀** 大庭。川岡。板倉。**滋賀** 武内。廣瀬。積善館。雲香堂。原田。**滋賀** 含英堂。梅龍堂。日新堂。超世館。**滋賀** 平安堂。**滋賀** 輝壽堂。**滋賀** 開益堂。開文舎。龜友堂。**滋賀** 川井。土屋。足立。**滋賀** 富士越。**滋賀** 元野木。積善館。西文社。金文堂。大分。中津。野依。梅津。中岡。佐野。**滋賀** 牧川。汲古堂。**滋賀** 長崎。**滋賀** 進堂。谷。**滋賀** 吉田。金光堂。**滋賀** 中津。小津。高堂。

70
69

